

〔国 語〕

○ 実施時間 【8:30~9:20】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は ~ 、19 ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督かんとくの先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（ ）なども一字と数えること。なお、マスには一字しか入れられません。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりに句点〔。〕をつけなさい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一

次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① いいユメを見た。
- ② キュウギ大会に出場する。
- ③ 子どもウンチンを払^{はら}って乗車する。
- ④ エンゲキ部に入る。
- ⑤ ケンキュウ者が集まる。

二

次の①～⑤の——のカタカナを漢字に改めたとき、同じ漢字を——で用いるものを、ア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 身のケツ白を明らかにする。
ア 受験をケツ心する。
イ ケツ管が浮き出ている。
ウ 団ケツして行動する。
エ 清ケツな環境^{かんきょう}を保つ。
オ 不可ケツな人材だ。

- ② コウ路を南にとる。

- ア 道路コウ事がおこなわれている。
- イ コウ空機が飛ぶ。
- ウ 真ッコウ勝負をする。
- エ コウ価な食材を使う。
- オ コウ果があらわれる。

③ キ付金が集まる。

ア 世キの大勝負に出る。

イ キ船が海上を行き交う。

ウ キ生虫が卵を産む。

エ キ機能的な状況をむかえる。

オ キ少価値のある石を手に入れた。

④ 驚いて悲メイをあげる。

ア 会社のメイ運をかける。

イ 公メイ正大な人。

ウ 同メイ関係を強化する。

エ 友人の考えに共メイする。

オ 有メイ無実な状態になる。

⑤ 物事のハイ景を探る。

ア ハイ句を作る。

イ 人間はハイで呼吸する。

ウ 作品をハイ見する。

エ ハイ水の陣でのぞむ。

オ 惜しくもハイ戦となった。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

私たちの脳・身体は皮膚によって外側の環境世界から区別され、そのような脳・身体の中に私たちの心がある。したがって、脳・身体や心が皮膚の外側にまで広がることはありえない。私たちはふつうこのように考えているだろう。この見方はたして正しいのだろうか。脳・身体や心が皮膚の外側にまで広がっていくことは、本当にありえないのだろうか。

たとえば、高齢になり、足腰が弱くなったため、杖について歩くようになったとする。杖について歩くことに慣れてくると、杖の先に地面の様子が感じられるようになってくる。杖を握る手に杖が感じられ、それを通して地面の様子が推察されるのではなく、杖の先に直接地面の様子が感じられるのだ。それは手で地面に触ったときに、地面の様子が手に感じられるのと似たような感覚である。

「 1 」
このような感覚をもつようになると、杖は自分の手と同じように、自分の身体の一部になったのだと言ってよいのではないだろうか。私の身体は杖と一体化して、皮膚の外にまで広がったのである。「 2 」

つぎに、心の拡張を見るために、筆算をする場面を考えてみよう。紙と鉛筆を使って35×47の掛け算をしよう。私たちはまず、ひとケタの数字どうしの掛け算を行って、その結果を紙のうえに鉛筆で書く。それが終わると、つぎにひとケタどうしの足し算を行って、その結果を書くという作業を繰り返す。このようにして筆算を行うとき、35×47の掛け算はいつどこで行われているのだろうか。それは当然、頭のなか（つまり脳）で行われていると思われるかもしれないが、本当にそうだろうか。

「 3 」

たしかに、ひとケタの数字どうしの掛け算や足し算は、脳で行われている。しかし、それ以外の計算も脳で行われているのだろうか。暗算を行うときは、すべての計算が脳で行われ、その最終結果がただ紙のうえに書き出されるだけだと考えてよいだろう。それにたいして、筆算を行う場合は、そうではない。そのような暗算ができないからこそ、筆算を行っているのである。そうだとすれば、筆算では、計算は主として紙のうえで行われ、脳ではひとケタの数字の掛け算と足し算が行われるだけだと考えるべきではないだろう。

うか。紙のうえに鉛筆で数字を書き並べていくことが、ここでの計算の主たる部分なのである。

紙と鉛筆で計算が行われているとすると、計算は心の活動であるから、心は紙と鉛筆にまで広がっていると②言ってしまう。心は皮膚で囲まれた脳・身体を超えて、紙と鉛筆にまで広がっているのである。皮膚で囲まれた脳・身体に紙・鉛筆を加えた全体によって、心が実現されるのだと言えよう。

紙と鉛筆を用いて筆算が行えるようになると、杖が身体と一体化して身体の一部となるように、紙と鉛筆は脳・身体と一体化してその一部となる。そして紙と鉛筆は計算という心の働きを担うので、それらは拡張した脳・身体によって実現される拡張した心の一部となる。「4」

身体の外にあるものが心の働きを担うことはたくさんある。電車は、私たちが数を入力しさえすれば、あとの計算をすべてやってくれる。コンピュータは、文書の作成、表計算、メールのやりとりなどの知的活動の重要な部分を担ってくれる。さきほどまでの話に従えば、私たちはこのような知的機械と一体化していることになる。知的機械が私たちの脳・身体の一部になり、私たちの心が知的機械にまで広がる。それゆえ、知的機械が行う知的活動は、私たちの心が行う知的活動の一部となる。

③ 私たちの脳・身体と心は、道具や機械との一体化によって、皮膚を超えて外部にまで広がる。では、それはいったいどこまで広がるのだろうか。今日、私たちはじつに多様な道具や機械を使って生きている。私が電車で通勤していれば、電車も道具のひとつとなる。では、杖と同じように、電車も私の脳・身体の一部だということになるのだろうか。

そう言うてかまわないだろう。もちろん、まだまだ大きな抵抗を感じるであろうが、通勤の電車は私の「X」である。それは比喩的な意味ではなく、文字どおりそうなのだ。通勤の電車は私の「X」の延長であり、私の身体と一体化して、私の身体の一部となっているのである。

④ しかし、さらに考えを進めると、奇妙な感じがしてくる。すなわち、この電車で通勤しているのは私だけではない。だとすると、その電車で通勤しているすべての人たちにとって、電車はその人たちの身体の一部となるのだろうか。つまり、電車はその人たちの身体の一部で、その人たちの身体はそこで重なりあっているのだろうか。これはかなり奇妙なことであろう。なぜなら、身体は

各人別々で、重なりあうことはないはずだからである。

たしかに身体はふつう重なりあうことがないが、結合双生児のように、身体を一部、共有する者もいる。身体の部分的な共有が可能であることを考えれば、電車を多くの人たちが共有する身体の一部と見ることも、それほど奇妙なことではないだろう。電車が

「X」と同じような働きをするのなら、電車は身体の一部であり、同じ電車で通勤する人たちは電車を身体の一部として共有している。こう見ると、けっして不可能ではないだろう。電車が事故で動かなくなれば、この人たちはみな、困る。まさに「共有の

「X」が動かなくなったのである。

では、これと同様のことが、知的機械についても言えるのだろうか。複数の人が同じ知的機械を使っていれば、その知的機械は複数の人たちの心の共有部分となり、その人たちの心は知的機械のところでも重なりあっていることになるのだろうか。今日では、世界中の人々がパソコンやスマホでインターネットにアクセスして、情報の収集や発信などを行っている。インターネットは世界共通の「知的インフラ」である。だとすると、インターネットは世界中の人々の心の共有部分であり、そこで世界中の人々の心が重なりあっていることになるのだろうか。これもまた、とてつもなく奇妙なことである。というのも、心もまた各人別々で、重なりあうことはないと思われるからである。

しかし、つぎのような例を考えてみると、必ずしもそうとは言えない。

Y

このように心の部分的な共有が可能だということを考えれば、同じ知的機械を使用する人たちは、その知的機械を心の一部として共有しているのだと見ることも、それほど奇妙なことではなくなるだろう。インターネットは世界共有の知的インフラなので、世界中の人々はインターネットを心の一部として共有しており、そこで心が重なりあっている。このように見ることも、けっして不可能ではないだろう。身体と同じく、心もまた部分的な共有が可能なのである。

(信原幸弘『「覚える」と「わかる」——知の仕組みとその可能性——』筑摩書房より)

注1 結合双生児……体が結合している双子のこと。

注2 知的インフラ……知的基盤きばん

問1 次の一文は本文中の「 」「 1」4のいずれかに入ります。この一文を入れるのに最もふさわしいところを選び、1～4の数字で答えなさい。

まず脳・身体が皮膚の外にまで広がり、その皮膚の外のものが心の働きを担うことによつて、心は皮膚の外にまで広がるのである。

問2 ①とありますが、筆算による「 25×47 の掛け算」はどこでどのように行われると筆者は考えていますか。その考えをまとめた次の一文の に入る言葉を、六十五字以内で答えなさい。

ここで、筆算による 25×47 の掛け算は行われる、と筆者は考えている。

問3 ②より後の本文から、「差しつかえない」と同じ意味を表わす言葉をぬき出し、五字で答えなさい。

問4 ③の例としてふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 人間が電卓に数を入力すれば、電卓が計算してくれる。

イ かみなり雷の音に驚くと、人間の身体は震える。

ウ コンピュータを使えば、人間はメールでメッセージのやりとりをすることができる。

エ 紙をリサイクルすれば、人間のために再利用することができる。

オ 鉛筆ではなくパソコンで文章を書くと、人間は疲れてしまう。

問5 本文中にある四カ所の には、体の一部を表わす同じ言葉が入ります。その言葉を漢字一字で答えなさい。

問6 ④とありますが、なぜ筆者は「奇妙な感じ」を抱いているのですか。次の書き出しに続けて、五十五字以内で答えなさい。

電車を身体の一部だとした場合、

から。

問7 Y には次のア～エの文を並べかえたものが入ります。ア～エの意味が通るように並べかえて、記号で答えなさい。

ア 現実のケースをよく考えてみると、両親は別々の悲しみではなく、同じひとつの悲しみを共有しているのだと見たほうが実情にそくしているように思われる。

イ 子供を事故で亡くした両親がその悲しみを分かちあうことがある。

ウ つまり、悲しみを共有の部分として、両親の心はそこで重なっていると言えるのである。

エ このとき、両親は同じ悲しみを抱いているのではなく、あくまでも別々の悲しみを抱いているのだろうか。

問8 次のア～オのうち、本文の内容にあてはまるものには○、あてはまらないものには×をつけなさい。

- ア 外側の環境世界から区別された私たちの脳や身体の内側のみ、私たちの心があると言える。
- イ 手で握った杖の先で直接地面を感じられるようになった場合、杖は自分の身体の一部になったのだと言ってよい。
- ウ 知的機械を使用した活動が、世界共通の仕組みとなっていることについて、私たちは警戒しなければならない。
- エ インターネットは世界で共有している知的インフラなので、個人が独占することは許されない。
- オ 同じ知的機械を使用している人々が、その知的機械を心の一部として共有していると考えられることは可能である。

四 次の文章 I・II を読み、後の問いに答えなさい。

I

昔、京都に博雅というふえふきの名人がいました。天子様につかえて、三位の位をいただいていたので、人よんで博雅の三位位といいました。「1」

ある晩、この博雅のうちへ、ふくめんをしたどろぼうが四、五人はいりました。その物音にふと目をさました博雅はいそいでふんから身を起こすと、そと音のしないように板じきの板をあげて、床下へもぐりこみました。おくさんと娘さんは、その晩しんせきへとまりにいつてちようどるすでした。

どろぼうは、だれも人のいないのいいことにして、あちこちを A あたりしだいにあけちらして、だいじなものをみんな持ちだしていつてしまいました。

博雅は、どろぼうがいつてしまったところを見はからつて、床下からはいだしました。見ると、自分の着物はもちろん、おくさんと娘さんの着物まで、一枚のこらず持つていつてしまいました。床の間にかけておいたかけものもありません。しまつておいたお金もありません。

「ははは……。よくこれだけきれいに持つてゆけたものだ。」

かなしむかと思いのほか、博雅はこういつて大口をあけてわらいました。

「なあに、かまわない。なまじつか、ものを持つてゐるからわるいのだ。持つてさえないなければ、取ろうといつたつて取られるものじゃあない。人間はなんにも持つてゐないのいいのだ。——どれあげがたまでもう一眠りしようか。」

こういつて、博雅はほうぼうを見てまわつたのち、また自分の部屋へかえつてきて寝床にはいろうとしました。そしてなにげなくまくらもとの厨子だなを見ると、そこにふだんからひじょうにだいにしていた竹の細ぶえがのこつていました。博雅はそれを見ると、飛びあがつて喜びながら、

「ありがたいありがたい。このふえをいっしょに持ってゆかれたものどばかり思っていたのに、さすがのどろぼうもこれには気がつかなかったものとみえる。これさえあればほかのものはみんななくなってもおしくない。」

こういって、その細ぶえを手に取りあげました。そうすると、きゆうに口へあててふいてみたくなりました。そこで博雅は立ちあがって、庭にむかった雨戸をあけはなすと、しずかにふえをふきはじめました。そとは青い月夜でした。「2」

博雅は自分のふくふえの音に聞きほれて、およそ二、三十分もむちゆうになってふいていましたろうか、うしろでなぜか人のいる気がしたので、きゆうにふえをやめてふりかえってみました。見ると、そこに見知らぬ男が一人、たたみに両手をつけてひかえていました。博雅はギョツとしていずまいを正しました。そのようすに、相手の見知らぬ男は、心持ちうしろへひぎをいすらしながら、うやうやしく博雅にむかって一礼しました。そして、

「さぞおどろきになったこととぞんじます。わたくしはさきほどこちらをあらまいたどろぼうでございます。」といいました。「どろぼう……。」と、博雅は思わず、おどろきの声をあげました。

「はい、どろぼうでございます。そのどろぼうが、じつはこうしておわびにあがったのでございます。」

こういって、そのどろぼうだという男ははじめて顔をあげました。見ると、顔じゆう目と鼻と口だけをのこして、あとは一面ひげむじやらな、見るからものすごい男でした。

「こうもうただけではおわかりになりますまいが、じつはさきほどなたもいらつしやらないのをさいわい、ほしいもののありたけを、みんな手下四人といっしょに持ちだしてゆきました。そして車に乗せて自分の住みかへ持ってまいろうと、一丁^{ちやう}ほどもひきだしたところでございましたらうか、ふいにうしろのほうでなんともいえないいふえの音が聞こえました。はじめはなんの気もなく聞いておりましたが、そのうちに、だんだんそのふえの音にひきつけられて、しまいには、一歩もまえへすすめなくなりました。

それで、じいっと耳をすまして聞きいつているうちに、いままでしてきた自分のわるいおこないが、あなたのおふきになるその清いふえの音にたいしてはすかしくなつてまいりました。いままで眠っていた良心が、先生のふえの音によびおこされたのでございます。そう気がつくと、わたくしは矢^やもたてもたまらなくなりました。自分のとめるのもきかずに、むちゆうになって先生のお宅のま

えまでかけもどりました。そして案内もこわずに、こうしてここまで歩いてきてしまいました。

先生、どうかわたくしのいままですてきた罪をおゆるしくください。そしてあらためて弟子の一人におくわえになって、ふえの一手でもお教えください。お願いでございます。」

こういって、そのどろぼうだと名のる男は、真心を顔にあらわしてたのみました。博雅は、その心根に感じました。そこで、さつそく罪をゆるして弟子の一人にしてやりました。ところがおぼえのはやいことといったら、あとから弟子になったくせに、ほかの弟子たちをおいぬいて、またたくうちに上達をしてゆきました。そして四、五年うちには、博雅の数ある門弟^{もんてい}のなかでも、五本の指におられるくらいのじょうずになりました。七年目には一ばん弟子になりました。十年たつうちには、もうおししようさんの博雅も、教える曲譜^{きょくふ}がなくなつてしまつたほどでした。「3」

ある年、用光は用があつてききょうの土佐^{とさ}へかえりました。そのかえり道に、船で淡路島^{あわじ}の沖^{おき}へさしかかったとき、海賊船^{かいぞくせん}におそわれました。用光は、いま殺されようとするときになって、海賊の頭をよんで、

「わしはじつはふえふきだが、一生のなごりにふえを一曲ふき終わるまで、殺すのを待つてくれまいか。」とたのみました。

「4」

「よろしい。」と頭はいつてゆるしてくれました。そこで用光は、心しずかに、自分のすきな短い曲をふきはじめました。すると、ふしぎなことに、いままでキラキラ光る太刀をひきぬいてひかえていた海賊の頭が、その刀をさやにおさめるとどうじに、そこへしゃがんで首をたれて聞きほれてしまいました。そして用光が一曲ふき終わるのを待つて、

「先生、あなたほどの名人を殺してしまうのはもったいない。どうぞこのまま船に乗つていてください。」といて、そのまま用光を難波の津^つ(いまの大坂^{おおさか})までおくつてきてくれました。あとで用光は、このことを先生の博雅に話したところが、先生は、

「そうか、おまえの腕^{うで}まえも名人の域^{いき}にたつたわい。」といて、たいそうほめてくださいました。

のちに、用光は、ししよの博雅にかわつて朝廷^{てうてい}につかえて、長くその名をのちの代にまでのこしました。

※ 作問の都合上、原文にある記号の表記を一部改めました。

- 注1 三位……朝廷から与えられる位の一つ。
注2 ほうぼう……色々な場所。方々。
注3 厨子だな……両開きの扉を持つ棚。
注4 いずらし……座ったままずらすこと。
注5 一丁……約一〇九メートル。
注6 一手……一曲。
注7 門弟……弟子、門下生。

II

その用光が相撲の使として西国へ下向しましたときに、紀伊国のあたりでしたか、海賊が現れて、ここで死んでしまうにちがいないと思われましたので、褐衣・冠をきちんと整えて屋形の上に出てすわっておりますところ、海賊の舟が漕いで近寄ってきたので、そのとき、用光は筆箆をとり出して、恨めしく思っている音色でいいようもなくすばらしく吹き鳴らしたところ、海賊どもはそれぞれ悲しみの気持がおこって、用光に褒美をさえ与えて、舟を漕いで離れて行ってしまったということなす。

※

『今鏡(下)』竹鼻績全訳注 講談社より

- 注1 相撲の使……相撲をとる人を集めるために遣わされた人。
注2 下向……都から地方へ行くこと。
注3 紀伊国……現在の和歌山県と三重県南西部のあたりの地名。
注4 褐衣……武官などが着用する上着。
注5 屋形……屋形船の略。
注6 筆箆……ふえの一種。
注7 道理をわきまえない武士……ここでは用光のこと。

問1 次の一文はIの文章中の「1」～「4」のいずれかに入ります。この一文を入れるのに最もふさわしいところを選び、1～4の数字で答えなさい。

用光というのが、この人の名でした。

問2 — ①とありますが、「どろぼう」たちに家のものを盗まれた後の博雅の様子の説明として、ふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 「どろぼう」たちがあまりにもきれいに家のものを盗んでいったので、笑いがこみ上げてきた。
- イ 「どろぼう」が家に入ったが、自分や家族には危害が加えられず、胸をなでおろした。
- ウ 眠りたい気持ちが強かったので、家のものがなくなってしまったことを残念に思わなかった。
- エ 家のものを盗られてしまったが、大切にしていたふえが残っていたことを喜んだ。
- オ ものを持っていない方が人間にとってよいと考え、気にしないことにした。

問3 — ②とありますが、「かたっぱしから」という意味になるように、Aに入る漢字一字を答えなさい。

問4 — X・Y・Zとありますが、これについて次の(1)(2)に答えなさい。

(1) この中に一つだけ驚いた内容が異なるものがあります。その異なるものをX・Y・Zのいずれかの記号で答えなさい。

(2) (1) で選んだ記号について、どのようなことに驚いているのか、二十字以内で答えなさい。

問5 — ③とありますが、博雅が「どろぼう」を「弟子の一人」にしたのはなぜだと考えられますか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「どろぼう」の隠されたふえの才能を見抜き、罪をゆるして自分の流派で育てたいと思ったから。
- イ 「どろぼう」の頼み方が真剣であり、罪をゆるして願いを聞こうという気持ちになったから。
- ウ 「どろぼう」の犯した罪は大したことではないと考え、最初から犯した罪を許すつもりだったから。
- エ 「どろぼう」が必死にお願いをする姿を見て、自分の弟子の中の誰よりも誠実な性格だと思ったから。
- オ 「どろぼう」がわざわざ謝罪に戻ってきた度胸に感心し、自分を超える名人になる素質を感じたから。

問6 — ④とありますが、これはどういうことですか。五十字以内で答えなさい。

問7 次の会話文は、授業で **I**・**II** の文章を読んだ獨太くと協平くんのもです。これを読み、後の(1)～(3)に答えなさい。

獨太 **II** に——⑤とあるね。話の内容が少し違ちがうけれども、**I** の「どろぼう」にもこの海賊たちと同じようなことがあったよね。協平 そんなんだけど、ぼくには分からないことがあるんだ。「どろぼう」は博雅の家に盗みに入ったのに、どうしてそのあと博雅に謝ったのだろう？

獨太 それはね、**a** からだよ。もちろん博雅に弟子にしてもらいたい気持ちもあると思うけどね。

協平 なるほどなあ。……ところで、先生によると **I** の後半部分の元になったお話の一つが **II** だということだったね。違いを話し合えと言われたけれど、ぼくには同じような話に見える。どこが違うのだろうか？

獨太 たとえば、終わり方に違いがあるのではないかな。**I** の後半は用光の才能やその後注目する書き方をしている、**II** は最後に「**※**」とあるように、海賊に関することで終わっているね。

協平 先生が授業で、話し手がその話をどう評価したかを話の最後に示す「話末評語」という用語があることを教えてくれたけれども、同じような話でも、どこに注目して語り終えるかで、伝えたいメッセージが変わることなのだね。

獨太 うんうん、勉強になるよね。……**I** の用光のように、一芸を修得しておくことと人生の助けになることがあるよね。そのことをあらわすことわざに「芸は **b** を助ける」というものがあるけれども、ぼくも何か一つのこと打ち込んでがんばってみようかな。

(1) **a** に入る言葉を、六十字以内で答えなさい。

(2) **※** に入ると考えられる言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海賊というものは、一切芸術を理解しないものでした。
- イ また昔の海賊は、やはりこのような情があったのでした。
- ウ どんなことであっても、芸の師匠ししやうというものはあってほしいものです。
- エ 色々の芸の道に通じている人は、このような徳をかならずあらわすものでした。
- オ 海賊の心というものは、みな風情を解さず残念なことでした。

(3) **b** に入る漢字一字を答えなさい。